

17世紀フランス・リュート音楽研究 (3)

—シャルル・ムトンの2冊のリュート曲集とその緒言をめぐって—

The Study of French Lute Music in the Seventeenth Century (Part 3)

— On the two lute books by Charles Mouton and their prefaces —

小川伊作

Isaku Ogawa

ABSTRACT

Two lute books by Charles Mouton were printed in the second half of the seventeenth century in Paris. His books were, together with the books of Denis Gaultier and Jacques Gallot, some of the last French lute school books published. These are important not because of their repertoires, but because of the information on lute music itself, its ornamentation, and the social conditions surrounding the lute.

In this paper, I translated and annotated the advertisement and instructions, mainly relying on the latest researches on Mouton and his lute books.

0. 序

フランシスクによりその幕を開けた17世紀フランス・リュート楽派は、1620-30年代の様々な調弦が試みられた実験的な期間をへて、17世紀中頃には11コース・ニ短調調弦による楽器が定着し、二人のゴティエによる一つの頂点が築かれた。ひとつは美しい挿絵とともに手稿のまま保存されている *La rhétorique des dieux*、そして今ひとつはやはり二人のゴティエの作品を収めた2冊の印刷譜である。そしてそこにジャック・ガロがゴティエの例にならって彫版した印刷譜が加えられる。しかしこの時期宮廷においてはリュートに代わって、より強い低音を持つテオルブ、もしくはギターが主流となっていた。ドニ・ゴティエ、そしてガロは宮廷ではなく、貴族の私邸を開放したサロンにその活躍の場を見出していったのである。*La rhétorique des dieux* はそれを明確に裏付けている¹。他方目を国外に転じるならばイギリスでは1650年頃、フランスの流儀を記したリュートの手引きが現れるなど²、フランスで生まれた新しいリュート音楽が国外へ伝播していった時期でもあった³。もちろんこの時期1652年にパリを訪れたヨハン・ヤコブ・フローベルガー Johann Jacob Froberger (1616-1667) がゴティエやガロに接したであろうことも、後のドイツの音楽にとって重要な事件であった。ドイツのリュート奏者ロイスナー親子がそれぞれに残したリュート独奏用のコラル曲集は、ドイツのリュート音楽がフランス・リュート音楽の様式をこの時期に取り入れたことを明確に示している⁴。

本論はこうしたフランス・リュート楽派の中で、17世紀後半に活躍したシャルル・ムトンの2冊のリュート曲集の緒言およびリュート奏法の手引きの翻訳・注解である。

1. シャルル・ムトンについて

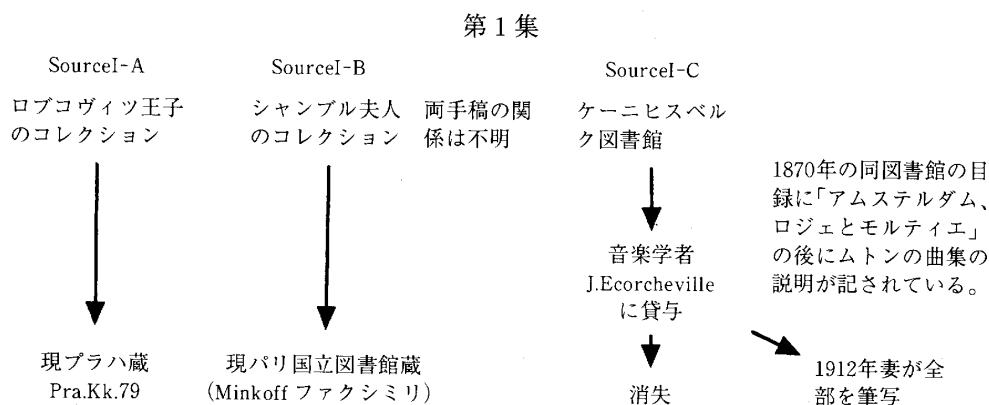
シャルル・ムトン Charles Mouton は父シャルルと母ジレット・オールモン Gillette Aulmont

の子供として1617年にパリで生まれた。受洗は同年1月21日の土曜日であった⁵。ムトンの初期の音楽歴は不明だが、母方のおじには王室ヴァイオリン奏者となったフランソワ・オールモン François Aulmont (1580頃-1660以降) がいたので、幼少のムトンに何等かの影響を与えたものと思われる。ムトンはドニ・ゴティ、ジャック・ガロらと同様公職に就くことはしなかった。したがってこの後ムトンの記録は散発的にしか見出せないが、ムトンの生涯が音楽家として高い評価を得ていたことはそれらの資料からも伺える。すなわちムトンはパリのサロンやアカデミーに出入りしていた詩人の詩にうたわれ⁶、上流階級の人々やさらには国王つきの語学教師を弟子に持った⁷。また身分の高い人物しかモデルにしなかった王室付き画家のフランソワ・ド・トロワ François de Troy (1645-1730) による肖像画が残されている⁸。当時の、そして同時代さらに18世紀に入っても、リュート音楽家もしくは紳士録などにムトンの名が言及されているのである⁹。

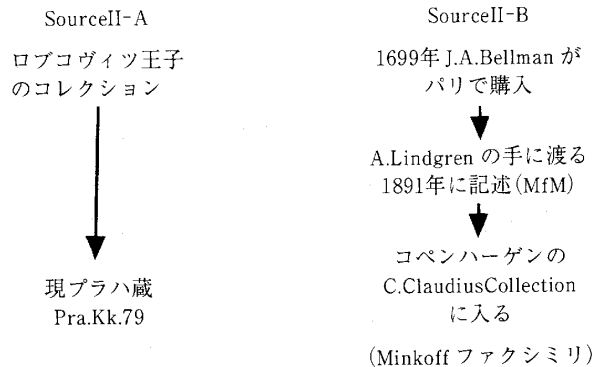
また音楽家としての活動は、ルーアンおよびサヴォア宮廷とのつながりから伺い知ることができる¹⁰。いずれにせよムトンの没年は1695年以降1699年以前と考えられる。1696年にはムトンは税金簿にその名前が現れ¹¹、1699年にはその年に完成されたリュート曲の手稿にルイ14世の宮廷音楽家テオルブ、ギター奏者、ロベール・ド・ヴィゼ Robert de Visée (17世紀後半-18世紀初頭) によるムトンのトンボーが含まれているからである¹²。

2. ムトンの曲集とその資料

ムトンは生前に何冊の曲集を出版したのであろうか。ムトンの現存する2冊の曲集は、現在第1集がプラハの図書館とパリ国立図書館、第2集が同じくプラハの図書館とコペンハーゲンの図書館に保存されている¹³。おそらくムトン自身は4冊の曲集を出版したはずであったが、残りの2冊は未だ発見されていない。というのは1715年10月にピエール・ガロ Pierre Gallot le Jeune (1660?-?) が若いドイツ人、ヨハン・フリードリヒ・アルマント・フォン・ウッフエンバッハ Johann Friedrich Armand von Uffenbach に、高名なムトンによって彫版された第4集を勧めているからである (Massip1987, XXII)。さらにアムステルダムの出版業者エティエンヌ・ロジェ Estienne Roger のカタログの記載に従えば、この出版者は初めの3集を1707年に、第4集を1712年以前に出版している (Lesure1969, p.75)。またヴァルターの音楽辞典にもムトンが立項されているが、そこにもムトンが4冊の曲集をあらわしたこと、そして先述のロジェの名が記されている¹⁴。以下にモニク・ロランの研究に基づき、現存するムトンの2冊の資料関係について図示する (*Euvres de Mouton*, XXIX-XXXIII)。



第2集



3. ムトンの2冊の曲集の成立年について

現存する上記2冊の曲集はいずれも出版日付を欠いている。ここでは前出ロランの説を紹介する。年代決定の根拠のひとつは第1集にはメヌエットが含まれていないことで、現在のところ1680年以前のタブラチュアにはメヌエットが含まれていない。そして1670年に没したオルレアン公爵夫人アンリエット・アンヌ・ダングルテール (1644-1670) にささげられた Tombeau de Madame, Pauanne (第18曲) が含まれていること、また緒言の最後に「亡きゴティエ氏」についての言及¹⁵があることから、第1集は1672年以降1680年以前に作成されたと考えられる。他方スウェーデンで編まれた1679年の日付の音楽書の目録に「クラヴサン」のためのムトンの曲集が挙げられている。そこには「かの印刷譜に含まれる曲の理解に役立つムトンによる緒言つき」と記されており、第1集のそれとほぼ同一である¹⁶。したがってここで言及されている曲集が、第1集と同一である可能性がある。もしそうだとすればムトンの第1集は1679年以前、1672年以降に作成されたことになる。第2集は第1集と同じく64ページからなり、第1集の序文に従えば、数年後、2曲のメヌエットが第2集に含まれていること (第19、25曲) を考慮にいと、1680年以降に刊行されたと考えられる。

4. 副題について

ムトンもガロと同じく自作品に標題を付した。この点は印刷譜からは副題を排除した両ゴティエとは対照的である。ここでは2冊の印刷譜に含まれる副題について意味を付す。なお副題の解釈についてはロランの記述 (*Euvres de Mouton*, XL-XLI) から訳出、必要に応じ筆者が [] 内に補筆した。なお Prélude など通常の楽曲名のみ作品は当然省き、また標題にそうした名称が含まれている場合、その語だけ訳出対象から除外した。

第1集

1-2 Tombeau de Gogo

恐らくこの曲はフーケの周囲の社交界と芸術界のリーダーである、マダム・ド・プレシス・ベリエールの有名なオウムを想起させることを目している。この動物の1653年の死はいくつもの詩に靈感を与えたが、そのひとつがサラザンのものである。

1-5 Les Cabrioles [宙返り]

1-7 La fiere [高慢な女性]

- 1-8 La belle homicide [美しき殺人者]
1-12 L'Impromptu [即興曲]
1-14 La caualliere [馬に乗っている女性]
1-16 La Princesse
コンデ公妃。ムトンはサラザンのおかげで彼女に近づきになったのであろう。
1-18 Tombeau de Madame
[オルレアン公爵夫人アンリエット・アンヌ・ダングルテール(1644-1670)；ルイ十四世の弟フィリップ・ドルレアンの妃。ガロも彼女にトンボーを献上している (Euvres de Gallot, no.10)]
1-19 La belle Anglaise [美しいイギリスの女性]
1-20 La Libertan [奔放な女性]
1-21 La deliberée [決定されたもの]
1-22 La belle Piémontaise [美しいピエモンテの女性]
1-23 La Bergère [羊飼いの娘]
1-25 La Complaisante [親切な女性]
1-26 Le Dépit amoureux [恋の恨み]
1-28 Le retour du Depit [恨みの回帰]
1-30 La belle Florentine [美しいフィレンツェの女性]
1-31 La belle Espagnole [美しいスペインの女性]
1-32 La bell Danceuse [美しい踊り子]

第2集

- 2-2 La Non Pareille [比類なき人]
ニノン・ド・ランクロ Ninon de Lanclos [(1620-1705)] の渾名。[彼女自身サロンを主宰。彼女は父のリュート奏者ランクロ (1592/3-1649) と同様にリュートを奏した。父のランクロはドニ・ゴティエと同じサロンに関係していた。ガロにも同名の曲がある (Euvres de Gallot, no.4)]
2-3 Le Toxin [毒素 (ドイツ語?)]
2-4 Le Depart [出発]
2-6 La Raisonneuse [口答えする女性]
2-8 La Quincy
多分マリ・ル・メトルのこと。彼女はクインシー領主シャルル・セヴァンと1623年に結婚した。セヴァンはまた参事院請願委員であり1644以降に亡くなっている。
2-9 La Dissimulée [隠されたもの]
2-10 La Promenade [散歩]
2-11 Le Dialogue des Grâces sur Iris [イリスについての三美神の対話]
2-12 La belle Iris [美しいイリス]
2-13 Le Mouton [ムトン]
2-14 Le Racomodement [和解]
2-16 La Bizare [風変わりなもの]

- 2-17 La Cheangeante [変わりやすいもの]
 2-18 La Mallassis
 多分17世紀のルーアンで印刷書籍商として知られていた一族のひとり、クレマン・マラシスの妻であろう。このことがムトンがルーアンに滞在したことを裏書する。
 2-19 La Ganbade [跳躍]
 2-21 Les Amans brouillez [仲違いした恋人達]
 2-22 La Veritable [真実なもの]
 2-25 La Fidelle [誠実な人; 信徒]
 2-26 Le Beau Danceur [美しい踊り手]
 2-27 La Constante [変わらぬもの]
 2-29 La Doucereuse [甘ったるいもの]
 2-30 Le Resveur [夢見がちな人]
 2-31,33 La belle Angélique
 高名なリュート奏者アンジェリク・ボレ。
 2-32 L'Amant conant [満足した愛人]
 2-34 L'Heureux himen [幸福な結婚の神]

5. 結び

以上の考察からシャルル・ムトンのリュート曲集が出版されたのは、従来述べられてきたように17世紀末、1698/9年ではなく¹⁷、むしろゴティエやガロの曲集と同時期、もしくは少し後に出版されたと考えたほうがより適切であることが明らかとなった。その構成は例えば第1集が32曲を含み、a mollとc mollが各々16曲。さらに各調の曲はプレリュードを先頭に12曲と4曲(a moll)、7曲と9曲(c moll)にグルーピングされていることから、やはりフランス独自のゆるやかな舞踏組曲の伝統を反映しているといえる。

緒言はガロの曲集にみられたような王侯貴族への献辞文はなく、曲集を出版するに至った動機を手短かに述べ、すぐにリュート奏法についての記述に入る。そこでは前半で使用する楽器についての詳細な説明と調弦法、両手の構えについての丁寧な説明が記されているが、これらはゴティエやガロの曲集にはみられなかったことである。後半では1から12まで番号を付して奏法について説明しているが、こちらは先行する曲集と共通している。ムトンの曲集で初めてみられる奏法はIIの左手第1指による複数弦の同時押弦(ギターで「セーハ」、「バレー」と呼ばれるもの)、およびXの低音弦におけるオクターヴ弦の弾き分けである。またガロと同様エトゥフェを欠いている。

以下にムトンの2冊の曲集の構成を示す。曲名の綴りはオリジナルのまま。

表

ページ	ピース	タイトル	調
No.	No.		
第1集			
1	1	Prelude	a
2-3	2	Tombeau de gogo Allemande	a

小 川 伊 作

4 - 5	3	Courante	a
6 - 7	4	Double de la Courante cy deuant	a
8 - 9	5	Les Cabrioles courante	a
10-11	6	Canarie	a
12-13	7	La fiere Courante	a
14-15	8	La belle homicide Courante de Mr Gautier	a
16-17	9	Double de la belle homicide	a
18	10	Sarabande	a
19	11	Gaulette	a
20-21	12	L'Impromptu Allemande	a
22-23	13	Prelude	a
24-25	14	La Caualliere, Courante	a
26-27	15	Chaconne	a
28-29	16	La Princesse Sarabande	a
30-31	17	Prelude en C solvt b mol	c
32-35	18	Tombeau de Madame, Pauanne	c
36-37	19	La belle Angloise Gigue	c
38-39	20	La Libertin Canarie	c
40-41	21	La deliberée Courante	c
42-45	22	La belle Piedmontoise; Courante	c
46-47	23	La Bergere Sarabande	c
48-49	24	Prelude	c
50-51	25	La Complaisante, Allemande	c
52-53	26	Le Depit Amoureux	c
54-55	27	Double	c
56-57	28	Le retour du Depit	c
58-59	29	Double	c
60-61	30	La belle Florantine, Sarabande	c
62-63	31	La belle Espagnolle Chaconne	c
64	32	La bell Danceuse; Gauottes	c

第 2 集

1	1	Prelude	fis
2 - 5	2	La Nompaille, Pauane.	fis
6 - 7	3	Le Toxin, Gigue	fis
8 - 9	4	Le Depart, Courante	fis
10-11	5	Double du Depart	fis
12-13	6	La Raisonneuse Courante	fis
14-15	7	Le Double	fis
16	8	La Quincy Sarabande	fis

17世紀フランス・リュート音楽研究(3)

17	9	La Dissimulée Gauotte	fis
18-19	10	La Promenade Prelude	fis
20-21	11	Le Dialogue des graces sur Iris	fis
22-23	12	La belle Iris Allemande	fis
24-25	13	Le Mouton Courante	fis
26-27	14	Le Racommodement	fis
28-29	15	Double	fis
30-31	16	La Bizare Gaillarde	fis
32-33	17	La Cheangeante Courante	fis
34-35	18	La Mallassis Sarabande	fis
35	19	Menuet la Ganbade	fis
36	20	Prelude en Ami ;a tierce majeure	A
37-39	21	Les Amans brouillez. Pavanne	A
40-41	22	La Veritable Courante	A
42-43	23	Double	A
44-45	24	Sarabande en Rondeau	A
46	25	La Fidelle Gavotte	A
47	26	Le Beau Danceur Menuet	A
48-49	27	La Constante Courante	A
50-51	28	Double	A
52-53	29	La Doucereuse Sarabande	A
54-55	30	Le Resveur Prelude	A
56-57	31	La belle Angelique Allemande	A
58-59	32	L'Amant contant, Canarie	A
60-61	33	La belle Angelique Courante	A
62-64	34	L'Heureux himen Passacaille	A

[論文注]

- (1) 拙稿『17世紀フランス・リュート音楽研究(1)』／ドニ・ゴティエの2冊のリュート曲集をめぐって』、大分県立芸術短期大学研究紀要第27巻(1989)：pp.27-48。；「17世紀フランス・リュート音楽研究(2)』／ジャック・ガロのリュート曲集およびその緒言をめぐって』、大分県立芸術文化短期大学研究紀要第32巻(1994)：pp.151-168。
- (2) *Mary Burwell Lute Tutor*, ca.1650.
- (3) このあたりの事情はゴティエやガロがその曲集の緒言で、彼らの作品が国外に伝えられていることを述べていることから明らかである。
- (4) エザイアス・ロイスナー Esaias Reusner (1660-1680の間に没)： *Musicalischer Lust-Garten* (プレスラウ、1645)；エザイアス・ロイスナー Esaias Reusner (1636-1679；親子同姓同名)： *Hundert geistliche Melodien evangelischer Lieder* (ベルリン、1676/78)。前者は11コース旧調弦、後者は同じく11コース新調弦のリュートのために書かれており、書法も前者は単純な和弦的書法で、後者はフラ

- ンス風の装飾とブリゼ様式で書かれており対照的である。
- (5) この項は1992年にフランス国立科学研究所より刊行されたモニク・ロラン編著のムトン作品集 (*Œuvres de Mouton*) の伝記研究 (同書 XV-XXIV) に基づいている。
従来ムトンが1626年生まれであるという説は Brenet1899以降受け継がれてきたが、ロランによれば収集家ピエール-ジャン・マリエットが、ド・トロワによる肖像画はムトンが64歳のときに描かれたものであると主張したことが根拠になっている。
- (6) ノルマンディーの詩人、ジャン-フランソワ・サラザン Jean-François Sarasin (1614-1654) が「伝説のムトン/すぐれたるリュートイストのムトン氏のために *Le Mouton fabuleux / Pour Monsieur Mouton, Excellent iouëur de Luth...*」と題した詩を残している。サラザンはパリに住み、当時パリの文化運動の拠点となっていたサロンやアカデミーに出入りしていた。かくしてサラザンはその周囲にアンジェリク・ボレヤボケ夫人といった高名なリュートイストのみならず同様に熟練した器楽奏者であるニノン・ド・ランクロヤスキュデリ夫人と知己を得ていた。
- (7) 1690年頃国王のドイツ語と英語の語学教師であるルネ・ミルラン René Milleran がリュート・タブラチュアの手稿を編んでいる (Bibliothèque Nationale, Paris, Rés.823)。編者によって作成されたリュートの主要な巨匠の目録の冒頭に「高名なムトン氏、私のリュートの師 *L'illustre M^r Mouton, mon maitre*」と記されていることから、彼がムトンの弟子であったことがわかる。また国王付きの彫版家ジェラルド・エドリンク Gérard Edelinck によって、彫版されたド・トロワのムトンの銅版画が残っているが、彼の娘がムトンの生徒であった。
- (8) 現在 F. ド・トロワが1690年に描いたムトンの肖像画がルーブル美術館に保存されている。
- (9) アブラム・デュ・プラデル Abraham du Pradel の *Livre commode contenant les adresses de la ville de Paris* の1692年版には音楽の項目中、リュート教師の箇所「ムトン氏、聖アントワーヌ通り… *Messieurs Mouton, rue saint Antoine, & du Buc, rue*」と記されている (p.63)。1680年にはムトンはル・ガロワなる人物の書簡にも言及されていた (Jean Le Gallois, *Lettre...a Mlle Regnault de Solier touchant la musique*, Paris, 1680)。ブレスラウに住んでいたリュート奏者フィリップ・フランツ・ル・サージュ・ド・リシエ Le Sage de Richée (1695年頃活躍) は1695年に自分の作品集 *Cabinet der Lauten* を出版するときに「ムトンを聴いた」こと、「幸運にも彼の弟子になれた」ことを自慢した。他方彼は自分の作品が「最も偉大な巨匠、デュ・フォ氏、ゴティエ氏、そしてムトン氏の基礎原理に基づいて」作曲されていると述べている。さらに30年も後になっても、ムトンは再び1727年エルンスト・ゴットリーブ・バロン Ernst Gottlieb Baron (1696-1760) によって最も高名なリュート奏者たちのなかに引用され (*Study of the Lute (Historisch-theoretische und practische Untersuchung des Instruments der Lauten*, Nuremberg, 1727/R1965)。Translated by D.A.Smith. California: Instrumenta Antiqua Publications, 1976. p.75)、1732年にはティトン・ド・ティエ Titon de Tillet (1677-1762) によって「ゴティエの最上の弟子の一人。ゴティエはリュートを弾くその方法のゆえ常に偉大な名声のなかにいた」と記された (*Le Parnasse François*, pp.405-406)。
- (10) 1640年前後のルーアンは芸術、特に文学活動が盛んであり、特に毎年12月に行われた詩の競技会にはサラザンやムトンに近い人々、例えばスキュデリ夫人らが参加していた。またムトン自身ルーアンの印刷書籍業者の夫人の名を曲名に借用した可能性もある(「4. 副題について」参照)。1673年にはムトンはサヴォワの宮廷で行われた「アタラント Atalante」というタイトルのスペクタクルに参加した。これは1673年12月6日ヴェネリア・レアルの劇場で行われた。
- (11) 1696年1月13日の日付の資料に、「ムトンとガロは15リーヴル課税される」と記されている (*Œuvres des Gallot*, XXI)。
- (12) *Manuscrit Vaudry de Saiznay* (Bibliothèque municipale, Besançon, 279. 152/153) I, p.76。
- (13) この項は *Œuvres de Mouton* の資料研究 (同書 XXIX-XXXIII) に基づいている。
- (14) 「ムトンは、前の人とは別の人物で、この楽器に対する手引きを最初の曲集に添えた4冊のリュートを編んだ。それらは全部アムステルダムでロジェとモルティエのところで銅版刷りで手に入る」[以下略]。原文は次の通り：

Mouton, ein anderer vom vorhergehenden, hat vier Bucher Lauten-Pieces, nebst einer Instruction vor dieses Instrument, welche im ersten Buche befindlich ist, editet. Sie sind samtlich zu Amsterdam bey Roger und Mortier in Kupffer zu haben. s.des erstern Catalogue de Musique, p.45. (J.G.Walter : *Musickalisches Lexikon*, 1732, p.426)

- (15) 'feu Monsieur Gaultier'. ドニ・ゴティエ Denis Gaultier (1603-1672)はしばしばこのように呼ばれた。
 (16) 原文は次の通り：印刷譜：Avertissement servant a l'intelligence des pieces contenues dans ce present Livre ; 「クラヴサン」のためのムトンの曲集：Avertissement de Mouton servant a l'intelligence des pieces contenues dans son Livre imprimé
 (17) VerchalyMGG; Ravel1972; LesureMouton; RollinMouton; BordasMouton.

6. 緒言の翻訳及び注釈

ムトン氏によって作曲された種々の旋法によるリュート曲集／パリの聖アンドレ・デザール通り，作曲者の家で販売／リヨン市庁舎近く，国王の許可付き

Pieces de Luth/sur differ.ts modes composeés/par Mons.^r Mouton/Le liure ce vend à Paris, Chez l'auteur rue Saint André des Arts,/Proche l'hostel de Lion, avec privilege du Roy. (綴りはオリジナル通り)¹

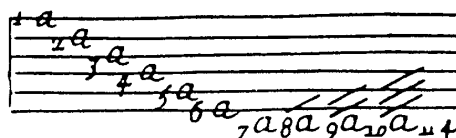
[] は訳補

緒 言

本書中に含まれる作品の理解に役立つ

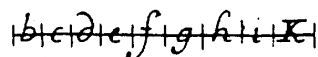
私は十分な配慮と正確さをもつて、自分の作品を彫版した。そこでは両手が大変よく記されているので、外国でもあたかも私がそれらを自分で示しているかのように容易に見出されよう。そして一度もリュートを弾いたことのない愛好家がいる可能性があるのだから、そういった人々のために始めるのがよいだろう。しかるに彼等に弦と指板について知ってもらおう。これは最初に知るべき2つのことがらである。1 1 列 [の弦] があり、その最初の二つは単 [弦] であり、他は複 [弦] である。このように記される。

譜例 1



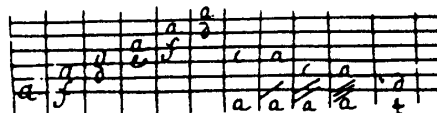
そしてまたこれらは一 [コース]、二 [コース]、三 [コース]、四 [コース] と呼ばれ、残りも同様である。フレットは弦に交差してネックにアルファベット順につけられ、第一フレットは上部上駒近くより始まる。この駒は象牙片で出来ており、頭部にある糸巻きに弦を留めるために弦の通り道が印されている。フレットは9つあり第一はb、第二はc、さらにd、などとする。




譜例 2



これは第一 [コース] であるシャントレルに限らず、私が記したように、指板に張られたすべて [の弦] にあてはまる：第一 [フレット] はいつも b、第二フレットは c、以下同じである。さらに私はここで通常のリュート調弦 l'accord ordinaire を示すことが適当であると考えた。もし異なる調弦の作品があっても、その中で変る文字だけを示すことになる；ユニゾンによる通常調弦：

譜例 3

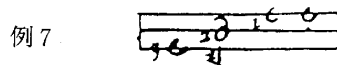


右手の親指は5コースまでは文字の下で表される。というのは6コースおよび残りの低音は常に親指で弾かれるので、なにも記さないからである。例4  第1指は文字の下で点で表される。このように例5  第二指は印はない。例6  右手小指は弦が留められている駒のそばに置き、残りの指は弾弦するために半円形の形を取り、親指は常に指の上方にみえるように伸ばさなければならない。

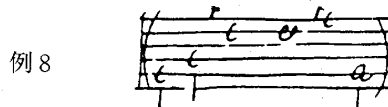
右手のための規則について示したのに続いて、左手のそれについても示すのがよからう。左手は手の内側が決して棹に触れないように、手首で手が円を描くように伸ばさなければならない。そうすれば指の先を、容易に弦上に置くことができ、文字に従って横向きに置かれているフレットの近くに置くことができるからである。各指は互いに分離し、ある文字から別の文字に移らなければならないときは、ほんの少しだけ指を上げるのが良い。そうすることでより多くの容易さが与えられるからだ。親指は棹の裏側、そしてシャントレル側の端に置き、可能ないかなる和音であっても、中央を越えてはいけぬ。親指は[他の]指に従い、第1指もしくは第1指と第2指の間に向い合うように置かなければならない。そしてなによりも手は絶対に不自然に堅くなつてはいけぬ。これはリュートの美しさにとって最も重要なことのひとつである。楽に弾くことはもちろん、急いで弾かないこと。せっかちな楽想は、繊細な耳を持ちこの魅力的な楽器の王に精通している人々には受け入れてもらえない。

私は私の曲集に含まれているその他の記号を理解するために、12の例[を示すこと]によって[本稿を]終ろう。その中には現在まで行われなかったものがあるし、私の曲集に含まれている作品をあたかも私自身が教えるかのごとく、一人で容易に理解できるようにするものもある。

I. 左手は文字の脇に数字で1.2.3.と示される。そして小指は右手の第2指と同様表記しない。記号が増えタブチュアを一層混乱させること避けるためである。



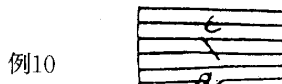
II. いつも左手の第1指を用いるが、指を寝かせるには、私は丸括弧型の円を記す。指はこの丸括弧がもうひとつの円によって閉じられるまで、寝かしたままにしなければならない。







III. 下側であれ上側であれ、ある文字から他の文字まで引かれた横線は。横線の開始から終るところまで保指が必要である。




III. 高音と低音の間に斜めに記された短い線は、その二つの音がたとえそろえて記されていても、分けるべきことを意味する。




V. 一度右手で弾弦した後左手で弦を引っ張るには、二つの文字の下側に小さな円弧が記され、それが二つの文字を繋いでいる。このように例11  そして時折小さい鉤のかわりにコンマが記される例12  これは同じ効果を生む。

VI. シュトは印の付けられた最初の文字を弾弦後、もうひとつの文字の上に指を落すことである。これはやはり二つの文字の下の小円弧で示される。このように例13  そして時にはひとつの文字にだけ記されることがあるが、効果は同じである。例14 

VII. マルテルマンは指を弦上に置き、それを弾いたあとごくわずか指を上げただけに元に戻す。それは半

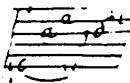
音だけでありまれに全音である。このように記される。例15 

VIII. トランブルマンは文字の後の小さい十字で記される。このように例16 

IX. 初めの二つの文字を第1指ですべらすように弾き、三番目 [の文字] を第2指で弾くカダンスは初めの二つの文字を繋げる斜め線で記される。

例17 

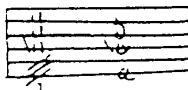
X. ある低音について同一の文字が小文字で記され、大文字と小文字を繋ぐ線が記されている場合、それは太い低音 [弦] だけを弾き、親指は次の細い [弦上] に留め、小文字が現れたら初めてそれ [=細い弦] を弾くべきことを示している。このように

例18 

XI. 和音を親指と第1指で一緒に弾くために、私はその和音を構成している数に従って文字の後ろにひとつもしくは二つの点を置く、そして指で和音を掻き鳴らさなければならない時には、私は低い音の脇の下に点を置く。このように。

例19 

XII. 時には和音をあたかもカダンスであるかのように扱う、つまり第1指をすべらせ、上方の最初の文字を第2指で最後に弾かなければならないことがあるが、私はその和音を斜めの短い線でわかるようにしよう。それは中に二文字を含むが、それらは低音の後すぐに弾かなければならない。

例20 

私は今は亡きゴティエ氏の *la belle homicide* を取り上げ、それに対してドゥーブルを私が作った。それは公にするのをはばかるほど、ひどくはなかるう。

この作品は有名であるという有利な点があるが、もちろんこの高名な著者によるすべての作品が有名であることはいうまでもない。そして私はドゥーブルはサンプルと必然的な繋がりを持っており他方なしには一方も存在しえないと信じている。

リュートにそれほど精通していない人は *Tombeau de Gogo* から始めないよう注意する。この曲は最初の曲だがすべての中でもっとも難しく、そうした人々に嫌気をおこさせるかもしれない。

私は第2集を彫版させるが、それはまもなく公けになろう。

【翻訳注】

(1) 本稿では原典として Minkoff のリプリント版 (*Charles Mouton/ PIÈCES DE LUTH / SUR DIFFÉRENTS MODES/ Premier et Deuxième Livres/ Introduction de François Lesure, Genève: Minkoff, 1978.*) を使用。

(2) 原資料で弧線が欠落している。

参照文献表

- BordasMouton 'Mouton' in *Dictionnaire de la Musique, Les hommes et leur œuvres*, Paris: Bordas, 1986, p.861.
- Brenet1899 Michel Brenet:*Notes sur l'histoire du luth en France*, Torino, 1899/R1973.
- Lesure1696 François Lesure:*Bibliographie des éditions publiées par Estienne Poger.....*, Amsterdam, 1696-1743, éd. de la S^{te} française de Musicologie, Paris, 1969.
- LesureMouton François Lesure:Introduction in *Charles Mouton/ PIÈCES DE LUTH / SUR DIFFÉRENTS MODES/ Premier et Deuxième Livres*. Genève: Minkoff, 1978.
- Massip1987 Catherine Massip:'Recherches biographiques' in *Œuvres des Gallot*, Paris: Éditions du centre national de la recherche scientifique, 1987, XV-XXIII.
- Œuvres des Gallot* *Œuvres des Gallot*, édition et transcription par Monique Rollin, Paris: Éditions du centre national de la recherche scientifique, 1987.
- Œuvres de Mouton* *Œuvres de Charles Mouton*, édition et transcription par Monique Rollin, Paris: Éditions du centre national de la recherche scientifique, 1992.
- Rave1972 Wallace J.Rave:*Some Manuscripts of French Lute Music 1630-1700 : An Introductory Study*. Univ. of Illinois, Ph.D., 1972.
- RollinMouton Monique Rollin:'Mouton, Charles' in *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, London:Macmillan, 1980, XII, p.656.
- VerchalyMGG André Verchaly:'Mouton' in *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*, West Germany: Bärenreiter, 1955, IX, p.679.